ミシェル・リオ『北のメランコリ』と「生き残ること」

――待つこと、死、配達――

竹内康史

序論

マージャリー・アーレント・サフィールの編纂による評論アンソロジー『知のメランコリ――科学時代の文学――』（一九九九）[1]は、フランスの現代小説家であるミシェル・リオ（一九五〇―）についての最初の研究書であり、現時点での唯一の先行研究といえる。この評論アンソロジーの構成には、ミシェル・リオという作家の特性とその捉えどころのなさがもっとも明確に表われている。つまりそこでは、生物学者、歴史学者、物理学者、記号学者、そして文学者それぞれの視座から、リオのテクストが百科全書的に読みほぐされており、こうした読みに耐えうる博識多聞ぶりがリオの小説の魅力の最たるものといって差し支えない。実際、リオは文芸評論家アラン・ナドーとのインタビューのなかで自分の小説に絡めて次のようにコメントしている。「（……）『群島』において、ある登場人物が『わたしたちの世界観を基礎づける三位一体』と呼んでいるもの。〈歴史〉、生物学、物理学。それらは、いい換えれば、人間について、生物について、物質についてわたしたちが知っていることであり、より文学的にいうなら、意識について、性と死について、〈自然〉についてわたしたちが知っていることだともいえるでしょう」[2]。ここで表明されているのはまさに〈すべて〉に対する知の志向といい換えてもよく、リオが文学に求めているものもこうした知の志向が打ち立てる基盤なしにはけっして成立しえないといってよい。

このようなリオの貪欲な文学的姿勢は、処女作『北のメランコリ』（*Mélancolie nord*, 1982）においてすでにその萌芽を

覗かせている。そこで文学と科学との新たなる関係構築への戦略的な展望が示されていることは疑いない。[3] ただし、それはいまだ戦略の域を出ないのであって、小説の構成素としては前景化しておらず、こういってよければ具体的に戦術化されているとはいい難い。あえてこのテクストにおいて前景化している知のかたちがあるとすれば、それは〈すべて〉に対する知ではなく（より焦点化された）「メランコリ」に対する知である。ここでいう「メランコリ」とは、のちに本論が述べるように、「死を待つこと」と不可分なものであり、さしあたり「死を待つこと」そのものと受け取っても問題はないと思われる。注意したいのは、この「死」が必ずしも生物学的な死に限定されているわけではないということである。それは身体に関わる死であると同時に、時間に関わる死であり、また、この世界でわたしたちに肉薄するものとしての死に他ならない。

したがって、この「死を待つこと」あるいは「メランコリ」に対する知は生物学的な関心から由来しているとともに、また広い意味で、歴史的、物理学的な関心から構成されていると考えられなくもない。だが、本論ではそうした俯瞰的な見方を追求するよりはむしろ、この「メランコリ」に対する知が小説という装置を通じてどのようにして呈示されていくのかを問いただしてみたいと考える。リオはもともとアカデミックな現場にいた人間であり、[4] 知に対して緻密に、思弁的に、そして体系的に取り組むことは彼にとってまったく不可能だったわけではない。だが、あえて小説という装置を借りて、より散漫に、感覚的に、そして断片的に知と戯れることを選択した背景には、知に対するリオの特異な視点が周到に隠されている。その視点とは、能動的であると同時に受動的な身ぶりのうちにしか獲得できない知を肯定するものである。

本論の狙いはまさに、散文というある意味で不真面目な言説に効を奏させて、リオが知の逸脱的な魅力を引き出そうとしている点にある。サフィールたちの仕事はおそらく、リオの小説に散逸する数多の知の要素を再抽出し、安定した知の枠組みにふたたび収まるようにそれらを濾過（ろか）することを目指すだろう。もちろん、その成果が非常に興味深いものであることは間違いないのだが、ことによればリオが小説というかたちで知の問題を呈示しようとした意義が半減してしまいかねない。したがって、本論は小説としてのリオのテクストにいっそう深くとどまりつつ分析するように努めたい。この意味で、科学的な知の多様性がそれほど前景化していない段階にある『北のメランコリ』を足がかりにして分析を出発させていくことは、より文学側にいるリオ、小説家としてのリオを見極めるうえで妥当な試みであるといえるだろう。そしてまた、『北のメランコリ』の分析において、その後のリオが〈すべて〉に対する知の志向を増殖させていくことを忘れず

見据えるために、「メランコリ」に対する知に着眼することは必要不可欠であると考えられる。つまり、今後のリオ研究のためにも、知一般に対するリオの一貫性ないし変遷をたどるうえでの線路を敷設しておくべきなのである。

とはいえ、本論は単にオーソドックスなリオの小説研究という枠内にとどまるものではない。実際、リオの描く「死」は、物語展開上で一種のクライマックスを生成するような要因としてのみ機能しているわけではない。そこではより一般的に、今日の世界にあって「死を待つこと」がどうあるべきなのかが力強く示されており、いってみれば倫理的、ひいては現代思想的な観点における「死を待つこと」に一石が投じられているのである。リオの「死を待つこと」は実存主義がかかった主体的な行為でもなければ、構造主義が提唱するような非主体的に課せられる事象でもない。それはちょうど能動性と受動性を併せもった身ぶりに他ならず、本論はそこに時間と他者に関わる画期的な問題系を見出すことを試みる。このとき、「配達」という視座に立つことによって、リオの「死を待つこと」が時間の遅延性という否定的な側面を逆に肯定しうるような契機に依拠していることが明らかにされるにちがいない。

本論

一、「待つこと」をめぐるふたつの時間軸——テクストと物語——

ミシェル・リオの処女作『北のメランコリ』のテクストは、単独で海に乗り出した一人称の語り手が思いがけず嵐に巻き込まれたあとで、なすすべなくただ漂流している場面から始まる。マストも舵も壊滅し、船内は浸水を起こしている。こうした絶望的な状況のなかで、語り手である「ぼく」は、いまやただの漂流物になってしまった船が潮の流れにのってどこか陸地にたどり着くのを待つことしかできない。四月二〇日の朝、それがこのテクストの始まりである。

ところで、『北のメランコリ』の物語の始まりはほぼ二ヶ月前に遡る。二月二五日の朝、「ぼく」のもとに一通の手紙が舞い込む。手紙の送り手は「ぼく」の知己であり、また学問上の仕事仲間でもあるオラフ・ボルグストロームというノルウェー人である。まだ二〇代の若者である「ぼく」に対して、オラフはすでに六〇歳近く、オスロ大学の著名な数学教授としてその地位を築きあげており、また音楽家でもあり、美術史家でもある。「ぼく」とオラフは近々パリで共同執筆する研究書の打ち合わせをする予定でいたのだが、オラフが持病の心臓病を悪化させたために、その約束は延期を余儀なくされる。

すなわち、オラフからの手紙は、その延期を報せるために「ぼく」に配達されたのである。物語はまずそこから始まる。

「ぼく」はみずからオラフに会いにいく決意を固めるのだが、不意にある突飛な計画が脳裏をよぎる。ようするに「ぼく」はひとりでカッター船を操舵し、フランスからノルウェーまで赴こうという計画にみずから魅せられてしまう。さっそく、船を所有しているブリウ・ド・グルヴァンという友人と連絡を取る「ぼく」。このブリウという男は元左翼作家であるが、文筆業そのものから転身して、いまや六〇歳を間近に控えながらも四人の船員たちとともに本格的な漁業を営む実業家である。ほどなく、「ぼく」は愛猫のエラスムを連れてブリウの住むブルターニュに向かう。だが、頼みにしていた船は予想以上に損傷が激しく、ブリウは「ぼく」の計画を無謀だとして反対を強める。しかし「ぼく」はブリウの助言に耳を貸さない。結局、当初は反対を唱えていたブリウもしぶしぶ協力、また、彼の補佐役であるジョブ、料理女タンジョーといった別の年輩者たちの応援もあって、「ぼく」はなんとかカッター船の修復を果たし、四月八日いよいよ出立の日を迎える。「ぼく」は愛猫エラスムを連れて、そのカッター船に乗り込む……。

このとき、物語はテクストのほぼ真ん中あたりに差しかかっており、途端にテクストの始まりに接続し直される。四月八日から四月二十日へ――漂流の場面。なるほど、この錯時法は、語りの技法上、それほど手の込んだものではないかもしれない。その素朴さは『北のメランコリ』の物語展開そのものが比較的単純な構造をとっていることに似ている。しかしながら、リオの語りの戦略は、非常に簡素なものであるために、いっそう明確な、そして決定的な効果をもたらすともいえるのである。この効果とはまさに時間をめぐる効果なのであり、もっといえば時間のなかでわたしたちが「待つ」ときに強いられるふたつの状態を炙り出す効果に他ならない。

テクストの前半――つまり、物語がテクストに再接続されるまで――、読み手は「ぼく」のもとにいずれ到来する漂流というカタストロフを知っている。「ぼく」を待ち受けるのはまさしくこのカタストロフであり――それは本来思いがけず(*=inattendu*)到来すべきものであるにもかかわらず――、あるいは語り手および読み手はこの約束されたカタストロフの到来を待ち侘びるのである。このとき、「待つ(=attendre)」という動詞は他動詞的であるといえる。つまり、いずれにしても「待つ」対象、目的語ははっきりしている。ところが、物語の後半になると、これから「ぼく」の身になにが起きるのかを読み手はあらかじめ知らないというかたちになってしまう。「ぼく」が最終的に出会うことになるのは異国の浜辺なのか、冷たい海底なのか、あるいは目指すノルウェーの港なのか、テクストはその結末を前もって明かしてはくれな

い。このとき主語が「ぼく」であるにしろ読み手であるにしろ、「待つ」対象は不在であり、したがってこの「待つ」は自動詞的である。実際、フランス語の「待つ／期待する（=attendre）」という動詞は自動詞でもあり他動詞でもある。テクストの前半で「待つ」目的語がはっきりしているぶん、テクストの後半で「ぼく」がいまや操縦不可能となったカッター船のうえで途方に暮れている悲壮ぶりはいっそう際立つ。「ぼく」には「もはや**待つこと**以外、すべきことはなにもなかった（……）」[5]のであり、この「**待つこと**」には目的語は不在なのである。

こうして見てくるとわかるように、『北のメランコリ』は、テクストの時間軸と物語の時間軸というふたつの時間軸を擁しており、このふたつの時間軸が交差することによって、「待つ」という動詞がもつ二面性を問題化する。「待つ」の自動詞的な面と他動詞的な面という二面性である。そして、このことは「待つ」が時間性に関わる動詞であると同時に、不在なる他者という、こういってよければ半透明な目的語に関わる動詞であることを暗示する。つまり、「待つ」は時間性と他者を併せて思考させることを要請する動詞なのであり、『北のメランコリ』がとりわけこうした思考のもとにテクスト化されているのだと見通す読みは後々けっして無為なものとならない。しかし議論を焦ってはいけない。以下の章立てでは、まずリオのテクストにおける「待つこと」の時間性をさらに詳しく考察しておく必要があるだろう。次に、わたしたちはなぜ、そしてどのようにしてそこに他者的な要素が介入してくるのかを見定めることになる。こうした議論を段階的に経ることによって、「待つこと」をめぐる議論はより前進した地平で取り交わされることになるにちがいない。

二、時間性、あるいは不確定な死の猶予を「待つこと」

「待つ」が時間性に関わる動詞であるというとき、この時間性（=temporalité）は現にこの世界に均質に、そして直線的に流れていると信じられている時間（=temps）と区別されなければならない。時間性とは、哲学的な伝統にしたがうなら、[6]わたしたちが時間に対して抱いている意識のありよう、感覚のありようをいう。この世界に均一な速度で流れているはずの時間を瞬間的だと感じたりあるいは滞留的だと感じたりするのも、厳密にいえば、時間の問題なのではなく時間性の問題であると考えられるだろう。

本論では、あくまでもリオのテクストにおいて、この時間性がどのように捉えられるべきなのかを考えなければならな

いのだが、さしあたり時間性とは時間に対する内的な認識態度であると規定しておこう。[7] ところで『北のメランコリ』では、前章で見たように、語りの戦略において、すなわちテクストと物語とのずれにおいて、時間性という問題が「待つこと」をめぐって立ち現われていた。いまやこのテクストのより細部に目を向けることで、リオにとっての時間性を考察しなければならない。ここで見えてくる時間性とは、端的にいってしまえば「死」に関わる時間性である。サフィールも述べているように、「死の誘惑はリオの小説に取り憑いている」[8]。実際、『北のメランコリ』のなかで、「死」は声高すぎるほどの主調音として鳴り響く。わたしたちがそこで聴きわける必要があるのは、死を通じての時間性が「待つこと」をめぐる時間性と無関係ではありえないということである。死を待つこと。『北のメランコリ』はこの死（それはわたしたちの身近にありながらあまりに漠然としすぎている）について、具体的かつ範例的に、まずブリウとオラフというふたりの初老の男と死との関わりを見極めるように促し、次に語り手である「ぼく」が嵐に巻き込まれ、切迫した死に直面するという経験を通じて取り組む。年齢の積み重ねによって死に接近することと偶発的に死と向き合うことという一見すると別々の死の情景を、『北のメランコリ』は果たして結びつけることができるのだろうか。そしてもし結びつけることができるとしたら、それはどのような作用によるのだろうか。

（一）老い――ブリウとオラフの場合

あらためて紹介しておくと、『北のメランコリ』では、ブリウ・ド・グルヴァンとオラフ・ボルグストロームというふたりの六〇歳近い人物が（少なくとも「ぼく」にとって）すこぶる魅力的な男性像をまとって描写されている。ふたりは「それぞれとうにぼくの父親の年齢になって」[9]おり、また、ともに極めて知性的な特性を与えられている。[10] ブリウは元作家であり、オラフは現役の学者である。「ぼく」はこのふたりと「もっとも緊密で、もっとも強い男同士の関係」[11]を結んできた。その関係強化の背景にはまず、「ぼく」がブリウとオラフを抜群の知性の持ち主として認めていることがある。つまり、この暗黙の敬意が世代を超えた友情を支えているのである。

だが、それだけではない。サフィールが述べるように、このふたりの年輩者がなにより「死と結ばれている」[12]ことを見落としてはならない。なるほど、オラフは心臓病を抱えているが、ここでいう死との結びつきはずっと単純で、一般的な意味である。それは年齢を重ねること、老いることという意味での、死と結びついているということである。若き語り手

にとって、知的に結ばれた人間関係は他にも数多存在する。にもかかわらず、なかでもブリウとオラフに「ぼく」がもっとも魅きつけられた理由とはまさしくふたりが年齢的に「死に近づいていること」[13]にあるのであり、さらにいえば、この死に対してけっして受動的な態度をとったりしないということにある。

ブリウとオラフにおいて、ぼくに対して一種の魅惑を発揮するもの、また、友愛関係や敬愛の念を抱く関係に通常備わっている特性に貴重なにかを、そしてまた心を騒がすようなにかを付加するもの、それこそはまさに、ときに穏やかでありときに苦悩的な、しかしつねに鮮烈な、死に対する能動的な認識に他ならなかった[14]。

死が年齢とともに近づいてくることに加えて、オラフとブリウにおいては、この死の接近が能動的に認識されている[15]。あるいはこういい換えてもよいだろう。死の時間がふたりのなかでより強度を増していくこと、そのうえで、その死へと近づく時間を能動的に待つことが重要なのだと[16]。そこでは死の時間ではなく、死の時間性――死の時間を内的にどのように認識するのかということ――が問題となっている。

では具体的に、ブリウとオラフにとって、死は内的にどのように認識されるのだろうか。ふたりが卓抜した知の持ち主であることはすでに触れた。だとすれば、彼らが死を内的に認識するとき、その認識は知の領域をめぐって行なわれることになるのだと考えるのが当面妥当かもしれない。年齢とともに、造詣の深まりとともに、死の接近とはなんであるのかを知ること。ところが、リオのテクストはそれだけの言及にとどまらない。死の接近を頭で理解するだけなら、「ぼく」もまたそれなりに自負するところがあるにちがいない。ただし、若い「ぼく」には、その死をめぐるなにかが頭のなかではある程度刻まれていても、「肉体においては依然として刻まれていない」[17]。テクストはこのことこそ「ぼく」が年齢的に欠けている決定的な点であるとし、およそ諧謔的に「癌を体験化することの欠如[18]」であるとさえ表現する。「それこそがブリウとオラフがはっきりと認知していたことであり、そして、ぼくがまったく知らなかったわけではないにせよ、実感することができていなかったことだったのである」[19]。体験化することの欠如、実感することの欠如――約めていえば、ブリウとオラフが死を内的に認識しようとしているというとき、それは知的な面にとどまらず、「ぼく」とちがって、なにより肉体的な面で認識しようとしているのだといえる[20]。

ふたりは精神的にそして肉体的に死を待つ。ただより重要なことは、精神的に死を待つ、肉体的に死を待つというそれぞれの「待つこと」は個々に分断可能なわけではないということである。「体験化する」や「実感する」ということばはこのとき、それだけで精神と肉体との分かち難さを強調するのだが、この点については以下の議論でさらに詳しく見てみることにしたい。

（二）死ぬまでの猶予――「ぼく」の場合

「体験化する（=expérimenter）」とは身をもって試み、そして身をもって感じることを意味する。そこには身体がもつ知のありようが集約されている。また、「実感する（=ressentir）」とは字義的に「強くre-」+「感じるsentir」という語の構造をなしていて、ようするに身をもって感じたことが後々までみずからのうちに痕跡として残っていくというさまを表わしている。そこでは身体によって知覚したことの時間性がはっきりと浮き彫りになっている。したがって、「体験化する」および「実感する」という動詞はなにかを知覚する動詞であると同時に、そこで知覚したものを残存させる、すなわち記憶させる動詞でもあり、ひいてはこの知覚と記憶との連絡を表わす動詞である。[21] もしこういってよければ、そこでは身体と脳とのつながりが表現されているのであり、現に脳が精神機能を預かる場であることを考えれば、身体と精神との不可分性が暗示されているといってもけっしていいすぎにはならないだろう。

実際、『北のメランコリ』には、精神、身体および時間性に関して、いっそう直接的な省察が含まれている。「ぼく」はブリウの反対を押し切り、ノルウェーのオラフのもとへ（ただ一匹の愛猫エラスムを連れて）単独航海に出帆する。そして船は難破する。嵐は去ったものの、ぼくとエラスムをのせたカッター船は浸水を起こしている。「ぼく」は手動ポンプによる水の汲み出しと短い仮眠を反復するだけの過酷な時間をすごす。このあいだ、エラスムは寝食と排便排尿行為を周期的に、そして悠長にくり返していただけだった。その漂流期間にいまだ終わりが見えないあるとき、「ぼく」はことばのわからないエラスムを相手に死をめぐる時間論を披瀝する。「まず、ぼくがいいたいのではですね、嵐のあいだそしてまさに発端の時間帯のあいだ、二種類の時間があったのだということです」。[22] 二種類の時間――それは本論においてはふたつの時間性と呼ぶべきものである。「ぼく」はそのひとつを「内臓的な時間（=un temps viscéral）」、もうひとつを「脳的な時間（=un temps cérébral）」と名づけて峻別する。

まず、「内臓的な時間」では、身体が切迫する死に拒否反応を起こし、制御不可能な状態に陥っている。

身体がなすがままにしておかねばならないわけです。たとえば心臓は痙攣し、神経は張り詰める。腸と胃はぎゅっと締めつけられる。筋肉は強張って石のようになる。（……）そこへきて、自衛する活力をもったこうしたあらゆる部位はとてつもなく不活性な作用によって死を待つわけです、一種怪物的な焦慮とともにね。[23]

この身体は、まさに到来してこようとしている死に対して、いたるところで拒絶の信号を発し、「怪物的な焦慮」を抱きながらただ「死を待つこと」だけを余儀なくされている。いい換えれば、間近な未来に差し迫った死を待つことが内臓的な時間において課せられていると「ぼく」はいい放つのである。

次に、「脳的な時間」については、死までの時間はあらかじめ計測済みになっていると「ぼく」はことばを継ぐ。つまり、そこでは前もって死の瞬間が想定され、この死の瞬間までの「猶予」だけが残されている。「（……）ちょうど計算という冷淡な無関心さでその病状の進行具合が計られる不治の病気のようなものですね[24]」。死の瞬間の「ぼく」の過去という（現在の「ぼく」の）未来を生き延び続けること。その複雑な時間性は、いずれ間近に迫っている死にたえず臨み続けなければならない「内臓的な時間」とは決定的にちがう。「脳的な時間」は、未来（=avenir）の死と向き合っていながら、過去を、すなわち記憶（=souvenir）をそこに巻き込もうとするのである。「すると、ひとつの顔、平凡な出来事、笑い声、ひとつの女性の身体、ひとつの風景が思い出されてきたのです[25]」。

こうしてみてくるとわかるように、「脳的な時間」と「内臓的な時間」は死を待つことの時間性のうちのふたつの段階の契機に他ならず、ブリウとオラフにとっての死を待つことの時間性とほぼパラレルな対応関係にある。すでに述べたように、このふたりは精神的にそして身体的に死を待つ。このそしてには単なる足し算以上の密接性がある。この密接性について、「ぼく」は当初漠然とした理解にとどまっていた。それが死を待つことの時間性がさしあたりふたつの段階に分かれると見てとった途端、この「ぼく」の理解はより前進したものになったといわなければならない。そもそも「脳的な」とか「内臓的な」とかいった形容詞は身体と精神を比喩するうえで奇妙な響きをもっている。なるほど、「脳」とはすでに述べたように、精神的な機能を司る特権的な器官にはちがいないが、周知のように、それは他方でまぎれもなく器官す

なわち身体の一部としての器官に他ならない。また、「内臓」とは身体をある程度まで的確に換喩しているといえるものの、実際、テクストは「内臓的な時間」について次のように補足する。「(……) 砕かれようとしているこの身体の拒絶においては、思考のようなものがあるんです、当然ながらね。(……)『ぼくはいる！』とか『ぼくは消えたくない！』と無限、カオス、未分化なる耳に向けて叫喚するのは硬くて特異ななにかなんです」[26]。死に直面した内臓は「思考のようなもの」をもつ。可能性としての未来に対して身体が反応するとき、そこでは表面的な物質的反応が作用しているのではなく、むしろ身体の内側に潜んだ精神的な（とはいえ意識そのものとは別の）なにかが反映されているのだと「ぼく」は解釈するのである。

以上のように、死を待つことは単に精神的にそして身体的に行なわれるのではなく、考える内蔵においてそして身体としての脳において、といういっそう複雑化した状態のなかで遂行される。いい換えれば、死は、「ぼく」によって、精神的な肉体と肉体的な精神との絡み合いを通じて待つことの対象となる[27]。この絡み合いはまさに（未来と過去が交錯した）時間性の複雑化と連動し、極めて特殊な感情反応を呼び起こす。

以下の議論では、ここで呼び起こされる感情反応あるいは気分――テクストが「メランコリ」と呼ぶもの――をめぐって考察し、死を待つことの第三の時間性とこの小説の結末とのつながりを見通してみたい。

(三) メランコリ

突如襲来した嵐の最中、「ぼく」は「内臓的な時間」を経て、「脳的な時間」が形成する猶予を生きていた。このとき、テクストは「ぼく」のなかに「メランコリの穴々」[28]が生じたと記述する。この表題を構成する「メランコリ」という語は、リオが用いる場合、けっして通俗的な意味を担ってはいない。なるほど、「メランコリ」はリオのその他の諸テクストでも頻繁に散見され、一概に定義づけることは容易ではない[29]。ただし、いま述べることが可能な特徴が少なくともふたつある。ひとつめとして、この「メランコリ」は死と結びついており、さらにいうなら、死を待つことの時間性の残余と呼ぶべきものなのである。「メランコリの穴々」はまさに死が到来してくるまでの猶予のなかで生まれ、その後も延々と残っていく。テクストは「メランコリ」が残滓していくこの時間を「ぼく」にとっての第三の時間性として位置づける。そこでは「メランコリは残るだろう」と二度にわたって念が押されている[30]。嵐が去り、身体の拒絶反応も絶望的な恐怖ももは

やないとはいえ、船がいつ沈没してもおかしくない状況は当面終わりを知らない。「ぼく」はこの第三の時間性にあって、死の不断の切迫とつねに隣り合わせたまま、終わりの不確定な猶予が果てしなく持続していくという新たな困難を引き受けなければならない（そこでは、死は「待つこと」の目的語として依然として存在すると同時に、死の瞬間がすっかり不確定になったために半ば消えかかってもいる――死という目的語の時間的な半透明化）。そして、死までの不確定な猶予とともに「メランコリ」は残っていくのである。

「メランコリ」のもうひとつの特徴は（あくまでも死に連関したものに変わりはないのだが）単に死を待つことの付随的な残余として生じたわけではなく、死を待つことの始まりとも無関係ではないということである。そもそもこの「メランコリ」という語は「ぼく」によって恣意的にもち出されてきたわけではない。このことばはオラフによってもまた用いられているのである。実際、小説の最後に付されているオラフの置き手紙のなかで、「メランコリ」ははっきりと明示されている[31]。また、「ぼく」がオラフとの共同研究のためにノルウェーへと赴くにあたって、その旅荷のなかに「メランコリ」に関する書物が含まれていたことも想起しておきたい[32]。

くり返すが、「メランコリ」とは「ぼく」とオラフとの共通項を抽出しうるものといえる。しかし、それがまた「ぼく」とブリウとの共通項になるのかというと、テクストは否定的であるといわなければならない。ブリウは当初から、「ぼく」の旅の計画を「自殺」的であるとして猛反対していた[33]。これに対して、オラフは後々、「ぼく」のこの危うい試みを強く肯定する。「もっとも不確かな乗り物、もっとも危険な道筋[34]」をあえて選択した「ぼく」の旅は、オラフにいわせればその旅の過程自体が紛れもなく生の過程そのものとなりうるのであり、「精神が無と死に抵抗して発明した、かたちをとった唯一の持続的な抗議[35]」でさえあるという。こうしてみると、ブリウとオラフは、生命をあえて危険にさらす「自殺」的な行為をめぐってまったく対極的な考えかたをもっていることがわかる。オラフが死と「メランコリ」を不可分のものであるとし[36]、この死が「自殺」的な動因によってもたらされるとするのであれば、「メランコリ」が死への接近を試みる段階からすでにその影を忍び寄らせていたと考えても問題ないだろう。

「メランコリ」は死を待つことにおいて、不確定な猶予とともにある残余であると同時に、死を待つことの始まりで「自殺」的な動因ともなる。「ぼく」は危機的な旅の途上、死を待つことの背後にこの「メランコリ」を見出す。それはまた同じ「メランコリ」を志向するオラフとの同調性を獲得した瞬間でもある。いま一度思い返さねばならないのだが、本章

の問題設定は、高齢によって、あるいは急な事故によって死へと接近するというそれぞれ異なった事象を、『北のメランコリ』というテクストが連結可能にしているかどうか、そしてもし可能にしているのなら、それはどのような作用によるものなのかというものだった。いまやその答えは目前にある。「ぼく」がオラフに対してそれまで抱いていた畏敬と共鳴は、「メランコリ」を媒介にしてより緊密な同調性へと移行する。ただし、少なくともテクストが明らかにしている限りでは、この「メランコリ」はオラフの側にはあってもブリウの側にはない。「ぼく」は死への接近のなかで、オラフと同調していくと感じるのだが、一方で、オラフとブリウとの異同を図らずしも察知しているともいえるのではないだろうか。

このときの「ぼく」は、かつてただ漠然とこのふたりが「死に近づいていること」[37]という共通点をもっていると感じていたにすぎないときの「ぼく」とは明らかに変化している。「ぼく」はブリウから離れ、オラフと同調する。ところが、このテクストはもう一度反転する。「ぼく」がほぼ一ヶ月にわたる漂流の果てにノルウェーに到着してみると、オラフはすでに死亡していた。そしてその死は、オラフが延命治療を頑なに拒んだためにもたらされた、自殺に近いかたちだったのである。[38]不確定だったはずの死までの猶予はここへきて、オラフ自身によって確定された猶予へと退行する。「ぼく」がオラフに感じていた同調性はいまやかりそめのものだったことが判明し、「ぼく」の「メランコリ」はオラフの（もしこういってよければ北の）「メランコリ」と再乖離する。おそらく、この小説のやりきれない陰翳は、オラフの死そのものよりもむしろこの再乖離によって落とされているにちがいない。「自殺」そのものが猶予の不確定性を打ち砕く。それは「メランコリ」そのものの自家撞着的な内破の瞬間である。

とはいえ、この小説の余韻にはもっぱらやりきれなさだけがあるのだろうか。たしかに、ブリウ、オラフ、「ぼく」それぞれの死を待つことの時間性を分析していく読みだけが唯一の読みならそうなるかもしれない。だが、さらに別の角度からの読みが試みられるとき、この限界を打破する可能性はおのずと切り開かれていくだろう。

三、配達、その遅延性がもたらすもの

前章では、死を待つことがおもに議論の軸だったが、それはあくまでも自分によって捉え難い自分の死という域を出なかった。その死の捉え難さは、死までの猶予の不確定さによってもっとも決定づけられていた。『北のメランコリ』にお

いて、「ぼく」は死までの猶予が不確定化していくのを身をもって経験するとともに、自分の死がもつ不確定さ、いってみれば他者性のようなものと邂逅していたのだといってよい。死までの猶予はそれがおよそ確定的であった時点でさえ、未来と過去の入り混じった時間性を形成していたのだが、その死が時間的に半透明化したことで、「ぼく」の死を待つことの時間性はますます扱い困難なものとなり、そこに「メランコリ」を宿し続けていた。

「メランコリ」とは、このテクストにおいて、混迷した時間性のなかで生じる一種の死の気分にちがいなく、したがって時間を経てもなお残っていくものとして「ぼく」に宿り続けていたのである。「ぼく」は、まさにこの「メランコリ」を通して、オラフにとっての「死を待つことの時間性」に限りなく近づく。ふたりの同調性の確立はなにより年齢差・世代差が克服された契機に他ならないのだが、テクストはこの同調性の光をつかのまのものとしてたちまちかき消し、ふたりの「死を待つことの時間性」はふたたび分断されることになる。

本章の問題設定は、刹那的であるとはいえ、いったんは克服されたかに見えた、「ぼく」とオラフとのあいだのこうした世代差が、このテクストでは他方で克服されることなく、むしろそれ自身として肯定されているのではないかというところにある。オラフは亡くなる前に「ぼく」に宛てて置き手紙を残すのだが、この手紙は、実際、オラフ自身が死んだあとも自分以外の誰かが生き残っているはずだという確信に支えられている。それは希望とさえ呼べるものかもしれない。死にゆく者によって語られる「無と死に対抗[39]」していく意志は他ならぬこの希望めいたなにかに依拠している。つまり、そこでは死（=mort）から「生き残ること（=survivre）」への視座の転換が企てられているのである。このとき、オラフが見つめる先にあるのは他者的なものとしての自己の死ではなく、他者にとっての自己の死の行方に他ならない。すなわち、オラフの死が（オラフにとっての他者である）「ぼく」の目にどのように映るのかを見定めるような読みをテクストは強く要請しているのである。

『北のメランコリ』において、他者の死へのこうしたまなざしは「手紙」に着眼することでいっそう浮き彫りになると本論は考える。オラフの置き手紙はやりきれなさが漂う小説の結末にあって、そこに一種の希望の光を射す。しかし、より重要であると考えられるのはじつは手紙の内容のほうではなくて運動のほうにある。

本論はこの手紙の運動を「配達」と名づける。ごく一般的に考えて、手紙は空間を跨ぎ、時間を横断して配達される。なるほど、より遠くの宛名人のもとへ配達されることは配達の魅力であり、配達の奇跡でさえある。だが、これとは逆に、

配達が時間を横断して遂行される点に関しては、否定的な要因としてしばしばみなされているのではないだろうか。配達に時間がかかること、つねに遅れて配達されることを、テクノロジーの欲望は克服しようと絶えず試みてきたし、ある程度までこの試みを実現させてきたといえる。[40] おそらく、配達の一般的な理想像が同時性にあることに疑いの余地はないだろう。

しかしながら、他者としての死から他者の死への、そして死から生き残ることへの視座の転換は、こうした配達の遅延性をあえて肯定するだろう。自己の死が厳密には経験不可能なものである以上、わたしたちは死を、他者の死を通じてでしか知ることができない。そして他者の死を目の当たりにするためには、なにより生き残ることが最大の前提条件となる。そこには他者の生きた時間とのずれが不可欠なのであり、そのずれが肯定されなければこの世界はあまねく心中的な悲劇をたどる以外にない。他者の生との時間的なずれ（世代差）は肯定される。そして、配達の遅延性こそ紛れもなくこのずれをもっとも際立たせるものだということを以下の議論で考えてみたい。

（一）二重の不在

オラフは、その死の間際に「ぼく」に宛てて書いた置き手紙の冒頭で、図らずしも次のように告白する。「（……）わたしがこうして手紙をしたためているとき、あなたはここからそう遠くない、洋上のどこかにいて、奇妙な旅の計画を実現させようとしているにちがいありません。**わたしはあなたを待つことはないでしょう**」[41]。オラフはみずから「待つこと」を停止させる。そのうえで置き手紙を残す。不在者である「ぼく」を待てない場合、オラフが及んだこの行為はおそらくふたつしかない対応のうちのひとつだといえる。

逆に、もうひとつの対応はブリウによって選択されている。テクストの最初のほう、「ぼく」が「奇妙な旅の計画」を思い立つところまで立ち戻ろう。「ぼく」はこの計画を実行に移すために、とりもなおさず（船舶を所有している）ブリウに電話をかける。その翌日、「ぼく」は住所変更をするために郵便局に出かける。すると、そこで山積みになっている郵便物のなかにブリウからの手紙を見つける（その手紙の内容は、旅の計画に対して異議を唱えるものであったのと同時に、とはいえブリウ自身は「ぼく」の来訪を根気強く待ち続けていくというものでもあった）。「ぼく」はブリウにただちに返事を書く。その翌朝、ブリウから電話がかかる――このとき、ブリウはみずからのせっかちな性格を露呈させている

のだが、問題なのはブリウが手紙から電話へと伝達手段に切り替えてしまうところにある。ブリウは「ぼく」を待てない。そこで彼がとる行動とは不在者である「ぼく」を電話口の前に、もしこういってよければ暴力的に召喚させることなのである。この行動は同様の状況においてオラフが選ぶそれとは完全な対をなす。つまり、ブリウが不在者を待てない場合には、せめてその不在者の声の現前が要請される。[42] これに対して、オラフは不在者に対してみずからも不在になることで「待つこと」の軛から逃れようとする。

こうしてみると、オラフの選択はたしかにブリウがかざす暴力性から免れながら、待ち続けることの困難からも同時に逃れているかのように見受けられる。しかし、この選択が結果的にもたらす二重の不在は、それ以前まで続けられた「待つこと」以上の困難をわざわざ掘り起こしているとも考えられるだろう。実際、オラフの置き手紙が読まれない可能性は十分にありえるし、『北のメランコリ』を読み通してきたわたしたちにとって、「ぼく」の旅の危さが承知されているぶんこの可能性はけっして低いものではない。その意味では、オラフの選択は「待つこと」の停止である以上に、しかしそれ以上の困難に賭ける新たな決意の現われであるにちがいない。

この決意の背後にはおそらく、オラフが自分が死んだあとも世界は存在し、生き残る者がいるはずだという信頼に似たなにかがあるといえる。ただし、そのなにかには確固とした下支えがない。より正確さを期すなら、「ぼく」とオラフとの関係性のみに拘泥していては、この下支えとなるものに対して盲目的になってしまうのである。

そこで、本論はふたたびブリウによる「待つこと」の失敗を読み直してみたい。そのうえで、「待つこと」の失敗におけるブリウとオラフとの対立がじつは表面的な問題にすぎず、むしろその彼方にある「待つこと」の逆説的な可能性のほうに目を向けなければならないことがはっきりとするだろう。この可能性こそ、死から生き残ることへの視座の転換に踏み切らせる動因となるものであり、もっといえば、遡及的に「配達」の遅延性を肯定するものとなるのである。

(二)「待つこと」の彼方に

ブリウが「待つこと」に失敗したとき、(オラフとはちがって)現前性を志向するからといって、そこにはけっして暴力性のみが存在するわけではない。むしろそのすぐ傍らには謙虚さのようなものが寄り添っているのである。

ブリウは「ぼく」から単独航海したいという申し出を電話で受ける(じつは最初に電話を用いたのは「ぼく」である)。

その電話を切ったあとで、ブリウはこの申し出の無謀さをあらためて振り返り、それに猛反対する意志を伝える手紙を急ぎ書く。とはいえ、彼は友人として慕う「ぼく」との久しぶりの再会を楽しみにもしており、「(……) わたしはあなたをここで首を長くして待っています[43]」という文でその手紙を締めくくる。「ぼく」はこの手紙を受け取るやいなやただちに返事を書くのだが、それが投函された日の翌朝、「ぼく」の電話が不意に鳴らされる。すでに述べたように、電話口の向こうの声は「ぼく」の返事を待ちきれなかったブリウのものである。早朝の電話に叩き起こされた、不機嫌な「ぼく」を尻目に「あなたは来るのですか来ないのですか。なにを待っているのですか[44]」とブリウは抜け抜けと尋ねる。

こうした経緯をたどり直してみればわかるように、ブリウはいったんは固めた「ぼく」を「待つこと」の意志を反故にした挙げ句、「ぼく」がなかなか来ないことに苛立つだけにとどまらない。彼はそこで、最終的にひとつの邪推を抱いているかのような発言をする。つまり、待っているのはブリウ自身の側ではなく、じつは「ぼく」の側ではないのかと考えすぎているかのような科白をちらつかせるのである。

もちろん、このような読みは、ブリウがその科白にいい含めている皮肉のパフォーマンス効果をあくまでも度外視するという身ぶりに立脚する。おそらく、実際にはブリウは「ぼく」のほうが待っているなどと邪推してしまうほどには控えめではない。にもかかわらず、ブリウが「待つこと」をめぐって深読みしているのではないかと深読みすることには、配達の遅延性が引き起こす、興味深い効果が見えてくるという利点がともなわれているのである。このことは看過できるものではない。

では、「配達」の遅延性が引き起こす重要な効果とはなんなのか。明白なことだが、「ぼく」とブリウとの手紙のやりとりが交わされているあいだで、配達の遅延性は時間的な空白をつくり出す。その空白は、手紙の送り手側にも受け手側にも属し切らない、いやむしろ双方に属する可能性をもった空白である。そこでは、手紙が届くのを待つのか、届けられるのを待つのか決定することはできない。ブリウが「ぼく」を待ちながらも、じつは「ぼく」のほうこそが（その対象がなんであれ、そしてその意図の所在がどうあれ）待っているのではないかと述べるとき、それは、配達の遅延性が形成する時間的な空白のなかで、双方が待ち合っている状況という可能性をほのめかしているのである[45]。

この他ならぬ時間的な空白が「ぼく」とブリウの双方に属しうるとするなら、似たような配達の関係にある「ぼく」とオラフとのあいだでも、同じ空白が存在するはずだと考えていく余地はじゅうぶんにある。実際、後者の場合、「ぼく」

は旅の出発前に二度にわたってオラフに手紙を出しており、[49]その返事が届けられた形跡がテクストにない以上、少なくとも手紙の配達に関していえば、待っていたのはむしろ「ぼく」のほうだったといえるだろう。そうだとすれば、「待つ」側であるはずの「ぼく」がオラフからの返事を待ちきれずに取りに赴くという構図が逆転的に浮かびあがってくる。もちろん、もう一方で、オラフが「ぼく」の到着を待ち侘びていたのもまたたしかである。以上の二点を併せて考えてみると、オラフの返事の配達が遅れてしまっているというまさにこのことのために、「ぼく」とオラフにもまた相互的に待ち合うという関係が確立されてしまっていることがはっきりしてくる。

とはいえ、オラフが「待つこと」を放棄したとすれば、その瞬間からこの相互性は霧消してしまうにちがいない。ただし、そこには新たな可能性がある。つまり、こうして配達の遅延性が相互的に待ち合うという関係を図らずしも打ち立てている以上、たとえオラフが「待つこと」を停止させたとしても、その相互性を保障する時間的な空白が消失しない限り、「ぼく」の「待つこと」のほうは依然として持続していることになるという可能性である。そこでは時間的な空白は肯定される。その空白のなかで、「ぼく」が生き残っていくこと、そしてオラフの置き手紙が残っていくことこそが「配達」の達成に貢献するのである。

結　論――待つことの肯定――

『北のメランコリ』には、テクストと物語に関わる大枠の構造上において転回点が標定できる。この転回点は『北のメランコリ』での「待つこと」をめぐる時間的な交錯をしるしづけると同時に、「待つ」という受動的な動詞が潜在的にもつ能動性（可能性としての目的語を要請するという能動性）を示唆する。

本論は、『北のメランコリ』において「待つこと」がこうして時間性となんらかの他者性に携わるということを二段階のアプローチを通じて考察し、その結果浮上してくる、まさにこの小説の余白に内在する死のありようを見定めることを試みた。

第一に、この小説のなかで、「待つこと」とは、なにより他者としての死を待つことであり、それはまた、死をどのような認識において待つのかという時間性そのものに他ならない。語り手である「ぼく」は死を待つことのこうした時間性

が放つ魅力を、年輩のふたりの知己であるブリウとオラフ双方のなかに察知し、そしてまた、みずからも洋上での嵐との遭遇を通じて同様の時間性をなぞっていくことになる。「ぼく」は死までの猶予がはらむ混迷した時間性を経験し、そこにともなう「メランコリ」を感じ取る。「メランコリ」はこの経験にとって単なる付随的なものではない。「ぼく」は「メランコリ」が自殺的な試みもあえて厭わないという動機性にすでに関わっていたことを認め、あるいはまたそれが、死までの猶予が不確定化してもなお残存していくものであることを識る。死への接近への試みおよび死までの不確定な猶予と係留した、この「メランコリ」はまさに死への接近のありようそのものにおいて、ブリウとオラフとのあいだで差異を浮き彫りにさせ、そして「ぼく」をブリウではなくオラフへと同調させる契機となる。ところが、「メランコリ」が自殺的な色合いを帯びるために、また、死までの不確定さがいつかは必ず解消されるものであるために、「ぼく」とオラフとのあいだの同調性はけっして恒久的にはなりえない。したがって、『北のメランコリ』はその帰結として死を絶望のしるしとして刻印し、やりきれない余韻をたなびかせる。

第二に、他方で、『北のメランコリ』は絶望と希望とが表裏一体となった死のありようを呈示する。この呈示に呼応する読みは、他者としての死から他者の死への視座の転換、また、死から生き残ることへの視座の転換を図ることによってその素地がつくられるのであり、具体的には手紙の運動としての「配達」という観点に着眼することで形成される。こうした読みは、テクストが厳密には「待つこと」の停止を描こうとしていることに気づいたときに強く要請されることになる。まさにこの停止の際に、ブリウは電話をかけ（現前性への志向）、オラフは置き手紙を残す（二重の不在）。しかし問題はこうした対立関係を打ち立てることにあるのではない。むしろその対立の彼方で、いずれにおいても「配達」がつくり出す時間的な空白が存在するということ、そして、この空白のなかで「相互的に待ち合う」という可能性が出現するということをなにより見過ごしてはならない。この可能性は、「待つ」という動詞が受動的な能動性という性質を帯びているからこそ生み出される、主格と目的格とのあいだの揺らぎそのものでもある。このとき、相互的に待ち合う者たちのうち、どちらか一方の「待つこと」の停止が双方の「待つこと」の停止、すなわち「待つこと」の完全な終止符を意味するわけではなくなる。むしろ、ひとつの「待つこと」が終わる瞬間、他者の死を受けとめる生き残る者の存在への眺望が開示される。そしてさらに遡及的に考えれば、生き残ることへの眼ざしがまさに「配達」の遅延性そのものの肯定に依拠していることがいまやおのずと明らかになる。

リオの作家活動はその出発点からすでに死との関わりを深くしているのだが、それははけっしていたずらに死を美化したり神秘化したりするものでもなければ、必要以上に否定したりひいては人間が超克すべきものとして取り扱ったりするものでもない。そこには特異であると同時にありふれたものでもある死への洞察があり、死を待つことの困難とその停止においてはじめて切り開かれる希望の風景がある。さらにいえば、リオの本領は「待つこと」の能動性を引き出し、にもかかわらず（安易な主体主義に傾くことなく）「待つこと」の受動性を同時に肯定するところにあるといわなければならない。

＊強調については、原則として傍点を用いた。ただし、引用文中の引用者の強調については太字で示した。

注

（1）Margery Arent SAFIR ed., *Melancholies of Knowledge—Literature in the Age of Science—*, State University of New York Press, 1999.

（2）Michel RIO, *Rêve de logique*, Seuil, 1992, p. 72 : [...]ce qu'un personnage nomme dans *Archipel* «la trinité qui fonde notre vision du monde» : l'Histoire, la biologie, la phisique, autrement dit ce que nous savons de l'homme, du vivant, de la matière, plus littérairement de la concience, du sexe et de la mort, de la Nature.

（3）たとえば次のような一節。「わたしにはまた次のように思われるのですが、つまり文学は、特に二〇世紀において、人文科学と呼ぶべき母親殺しの娘たちを産み落としてきました。」;Michel RIO, *Mélancolie nord*, Seuil, 1997(première publication, Balland, 1982), p.128 : Il me semble aussi que cette littérature a engendré, tout spécialement au xxe siècle, des filles matricides qu'on a convenu d'appler sciences humaines, ここでは文学と科学とのアンビヴァレントな関係が示唆され、そうした視座を踏まえたうえで、今日の文学のありかたを問おうとするリオの姿勢が明らかにされている。

（4）リオは大学を卒業後、フランス社会科学高等研究院に進学し、クリスチアン・メッツ（映画研究者）やアルジルダス・ジュリアン・グレマス（意味論的構造分析学者）等の指導のもとで一時は研究職の道を志している。詳しくは以下の文献を参照せよ:Margery Arent SAFIR, "Introduction", in *Melancholies of Knowledge — Literature in the Age of Science* —, pp.21-22.

（5）Michel RIO, *Mélancolie nord*, Seuil, p.96 : Il n'y avait plus rien à faire, sinon attendre[...].

（6）古代ギリシアから、カント、フッサール、ハイデガー（そして現代物理学）に至るまでの「時間性」をめぐる変遷については、以下の文献を参照せよ：ポール・リクール『時間と物語Ⅲ』久米博訳、新曜社、一九九〇年、一一一―一七七頁。

（7）ただし、たとえばハイデガーにとって、時間性（テンポラリテート）とはけっして自己閉鎖的・自己完結的な、すなわち完全に内的なもの

ではない。誤解を恐れず簡潔にいえば、現存在は脱自的な状態となり、世界内存在として時間を捉える。本来、現存在はまさに到来しようとしている時間とすでにあった時間とのあいだに現在的瞬間を見出す（これに対して通俗的時間概念においては、非本来的に、現前としての現在が優位に立ち、そこから「等質的な今の無限の継起」としての時間が世界に投影されてしまう）。とはいえ、それは個々人である《わたし》を軸にした時間性であり、他者の側から働きかけてくる作用は一切度外視されている（そこでハイデガーのいう「他者」とは、現存在とともに存在はしていても、現存在を脅かすような絡み合いは起こさない）。本論では、時間性がある種の他者性という外部的な関わりから独立していないという考えかたに最終的に与するつもりであるが、時間性が、内的にせよ外的にせよ、時間の捉えかたを出発点としている以上、議論を整理するためにも、さしあたり本文で示したような規定を行なった。また、本論はあくまでもリオのテクストにおける時間性を射程に入れており、それは必ずしもハイデガーの時間性とは合致しえない（たとえば、ハイデガーは漠然とした未来および過去を志向する「期待」や「忘却」といったありようを非本来的であるとして批判するが、本論はむしろこの批判を再批判する立場にある）。ハイデガーの時間性については以下の文献を参照せよ：マルティン・ハイデガー『存在と時間（下）』細谷貞雄訳、筑摩書房（ちくま学芸文庫）、一九九四年、とりわけ一六六―四二七頁。マルティン・ハイデガー『現象学の根本諸問題』（「ハイデガー全集第24巻」）溝口兢一／松本長彦／杉野祥一訳、創文社、二〇〇一年、三八九―四七〇頁。木田元『ハイデガー』岩波書店（岩波現代文庫）、二〇〇一年、七八―八六頁および一一四―一三三頁。竹田青嗣『ハイデガー入門』講談社（講談社メチエ）、一九九五年、一三四―一五〇頁。また、ハイデガーに対するリオのアンビヴァレントな言及は以下の文献を参照せよ：Michel RIO, *Le Principe d'incertitude*, Seuil, 1993, p.43. Michel RIO, *Manhattan terminus*, Seuil, 1995, p.102. 後者の場合、ハイデガーの形而上学的な完成度の高さが評価されており、前者の場合、形而上学的な思弁の限界が指摘されている。

(8) Margery Arent SAFIR, "It is not safe to know", in *Melancholies of Knowledge—Literature in the Age of Science—*, p.48 : The seduction of death inhabits Rio's novels.

(9) RIO, *Op.cit.*, p. 33 : Chacun avait largement l'âge d'être mon pere.

(10) サフィールは、ブリウとオラフを「ぼく」にとってのメントールである指摘する（すなわち、「ぼく」をテレマコス的であるとする）。そもそも、サフィールは、その論考のなかで、リオの初期テクスト（『北のメランコリ』から『マーリン』まで）に顕著な近親相姦的志向と百科的な知の志向とを結びつけて論じようと試みる。このふたつの志向の連結は、最初の女性としての／最初の教育者としての母親という視座に基づく。サフィールは、実際の神話でテレマコスを導いたのがメントールの衣装をまとったアテナであることに言及し、ブリウとオラフも男性を装っていると解釈する。「ぼく」は海（フランス語で「mer」――母親（=mere）と同音異義語である）を渡ってブリウのもとからオラフのもとへ向かう。ところが、たどり着いてみると、オラフはすでに死亡しており、「ぼく」は彼が遺した一通の手紙を手にする。そこでは文学が「母親」として擬人化されている。こうした一連の議論はたしかに興味深いものであるが、（サフィール自身も強調する）ブリウとオラフが「死と結びついている」という観点が結果的になおざりにされてしまっている感が否めない。また、『北のメランコリ』

のタンジョーや『不確定性原理』のマルトに見出されるような、およそ性的な魅力を秘めていない、しかしより母性的な女性の存在を説明できない。

(11) RIO, *Op.cit.*, p.33 : mes relations masculines les plus proches et les plus forts

(12) SAFIR, *Op.cit.*, p.50 : linked to death

(13) RIO, *Op.cit.*, p.34 : l'approche de la mort

(14) *Ibid.*, p.35 : C'était cette connaissance active de la mort, tour à tour sereine et angoissée, toujours intense qui, chez Brieuc et Olaf, exercait sur moi une sorte de fascination, et ajoutait au caractère ordinaire de rapports d'amitié et d'estime quelque chose de précieux et de trouble.

(15) 本論脚注28を参照せよ。

(16) 積極的に死を認識しようとするブリウとオラフの対極として、テクストは受動的にしか死と関わりえない、あるいは死と無関係であるかのように装うありようを「死骸主義 cadavérisme」(p.34) という独自の用語でいい表わす。それはまず成熟しきっているにもかかわらず、死を知ることに無関心な若者を指し、また、死が間近に迫っていることにただ怯え、惨めになっている老人および死に対して無知を装う老人のことでもある。テクストでは、前者の老人が「純粋な待機 une pure attente」(p.35) 状態にあると記述されている。この待機状態は、わたしたちがいうところの、完全に自動詞的な「待つこと attendre」に他ならず、そこには他動詞的な側面がそっくり排除されてしまっている。

(17) *Ibid.*, p.36 : non imprimé encore dans ma chair

(18) *Ibid.*, p.36 : faut d'avoir expérimenté ce cancer

(19) *Ibid.*, p.36 : Voilà ce que connaissaient clairement Brieuc et Olaf et que, sans être totalement dans l'ignorance, je ne pouvais moi-meme avoir ressenti.

(20) 「知的な」という垣根を越えて、『北のメランコリ』は死を待つことを思考可能にする。このとき、おそらくは知的とは呼べないタンジョーやジョブという登場人物が、ブリウやオラフにひけをとることなく、「ぼく」との関わりにおいて魅力的な特性を担っていることに目を向けてみるのもたいへん興味深い読みを生産するはずである。彼らは肉体によって身につけた技術によって生きてきた者たちであり、ブリウやオラフが「知識」に関わる者たちであるとするなら、タンジョーやジョブは「知恵」に関わる者たちと呼べるかもしれない。いずれにせよ、『北のメランコリ』が知と肉体との分かち難さをここでも喚起していることに変わりはない。

(21) たとえばジークムント・フロイトがこの知覚と記憶とのつながりの謎について重要な思弁を施している：ジークムント・フロイト「マジック・メモについてのノート」(『自我論集』竹田青嗣編、中山元訳、ちくま学芸文庫、一九九六年)、二〇二—二一二頁。

(22) RIO, *Op.cit.*, p.101 : Avant, je veux dire pendant la tempête et toutes ces amorces de naufrage, il y avait deux sortes de temps.

(23) *Ibid.*, p.101 : Il faut laisser faire le corps : le cœur se crispe, les nerfs se tendent, les tripes et l'estomac se nouent, les muscles se bandent et

devienment de pierre, [...]et tout ce champ d'énergie défensive, en formidable travail inerte, attend la mort avec une sorte de monstreuse impatience.

(24) *Ibid.*, p. 102 : [...]comme une maladie incurable dont on soupese le progrès avec le détachement froid du calcul.

(25) *Ibid.*, p.103 : Et il me revenait un visage, un fait banal, un rire, un corps de femme, un paysage.

(26) RIO, *Op.cit.*, p.101 : Dans le refus de ce corps tendu à se rompre, il y a de la pensée, évidement. [...] C'est quelque chose de solide et de particulier qui hurle "je suis!" et "je ne veux pas!" aux oreilles de l'infini, du chaos, de l'indifférencié.

(27) ひとついい足しておかなければならない。つまり、考える内蔵にせよ身体としての脳にせよ、それらはそれぞれ「ぼく」の意識の統御をはみ出すものだったということである。死を待つことの時間性はいわば「ぼく」の内部にありながらにして「ぼく」を逸脱していくものを「ぼく」自身に再発見させる。すなわち「ぼく」は自己のなかにまったく他者的なものを見出す。だとすれば、厳密にいって、死は能動的に待つことのできないものである。死は意識的な能動性によって待たれるのではなく、むしろ意識とは別のところで否応なく待たれるものに他ならない。あえて誤解を恐れずにいうなら、その受動的な状況を能動的に肯定することこそ死を能動的に待つことであるといえるだろう。自己によって所有されない身体については、たとえば以下の文献を参照せよ：鷲田清一「所有と固有」（鷲田清一／大庭健［編］『所有のエチカ』ナカニシヤ出版、二〇〇一年）二七―三八頁。

(28) RIO, *Op.cit.*, p.103 : les creux de la mélancolie

(29) 「メランコリ」が「知」と関連づけて思考されてきた歴史的背景については以下の文献を参照せよ：レイモンド・クリバンスキー／アーウィン・パノフスキー／フリッツ・ザクスル『土星とメランコリ』田中英道監訳（榎本武文／尾崎彰宏／加藤雅之訳）、晶文社、一九九一年。また、「メランコリ」が「死」および「自殺」と関連づけて思考されてきた精神分析的背景については以下の文献を参照せよ：ジークムント・フロイト「悲哀とメランコリ」（『フロイト著作集6』井村恒郎／小此木啓吾他訳、人文書院、一九七〇年、一三七―一四九頁）。ジュリア・クリステヴァ『黒い太陽――抑鬱とメランコリ――』西川直子訳、せりか書房、一九九四年。

(30) RIO, *Op.cit.*, p.103 : Il restera les creux de la mélancolie. ゆえに、*Ibid.*, p.104 : Il restera la mélancolie.

(31) *Ibid.*, p. 124 et p.125.

(32) *Ibid.*, p.18. 「メランコリ」研究者であるパノフスキー、プレオーの名前がそこには見受けられる。

(33) *Ibid.*, p.20.

(34) *Ibid.*, p.129 : le véhicule le plus incertain, l'itinéraire le plus dangeureux

(35) *Ibid.*, pp.129-130 : la seul forme de protestation durable que l'esprit ait inventée contre le vide et la mort

(36) *Ibid.*, p.124 : La vision d'une mort voisine est la mélancolie, [...]

(37) *Ibid.*, p.34 : l'approche de la mort

(38) オラフの死の自殺性については、以下の文献を参照せよ：Jean-Michel RABATÉ, "The Temptation of the Last Man", in *Melancholies of Knowledge—Literature in the Age of Science—*, p.134-135.

(39) RIO, *Op.cit.*, p. 102 : contre le vide et la mort

(40) たとえばエレクトロニクス・メイルが目指す欲望を想起してよい。

(41) RIO, *Op.cit.*, p.123: [...]au moment où je vous écris, vous devez être sur la mer, peut-être non loin d'ici, en train de réaliser votre curieux projet de voyage. Je ne vous attendrai pas.

(42) 声が現前性を喚起することについては、たとえば以下の文献を参照せよ：ジャック・デリダ『根源の彼方に——グラマトロジーについて（上）』足立和浩訳、現代思潮社、一九七二年、とりわけ二一—六一頁。

(43) RIO, *Op.cit.*, p.21 : [...]je vous attends ici avec impatience.

(44) *Ibid.*, p.25 : Vous venez oui ou non? Qu'est-ce que vous attendez?

(45) さらにいえば、「待つこと」のその相互性が、ブリウと「ぼく」との「交信（=correspondance）」という行為に潜みがちな幻想——すなわち（無時間的な見方による）双方向性の幻想の背後にある、実際にはふたりの伝達運動が単方向的でしかありえないという事実に反する幻想——を打破することに依拠しているということを加えて考慮しておきたい。つまり、「待つこと」の相互性はここで、二通の手紙が互いにすれ違いあって配達されているから生じているのではなく、実際上では一通の手紙が単方向的にしか配達されていないという状況において発動しているのである。単方向性によって導かれる相互性というパラドックスがそこには存在する。

(46) RIO, *Op.cit.*, p.18. および、*Ibid.*, p.49.

参考文献：

（一次文献）

Michel RIO, *Mélancolie nord*, Seuil, 1997(première publication, Balland, 1982)

Michel RIO, *Rêve de logique*, Seuil, 1992

Michel RIO, *Le Principe d'incertitude*, Seuil, 1993

Michel RIO, *Manhattan terminus*, Seuil, 1995

（二次文献）

木田元『ハイデガー』岩波書店（岩波現代文庫）、二〇〇一年

ジュリア・クリステヴァ『黒い太陽――抑鬱とメランコリ――』西川直子訳、せりか書房、一九九四年

レイモンド・クリバンスキー／アーウィン・パノフスキー／フリッツ・ザクスル『土星とメランコリ』田中英道監訳（榎本武文／尾崎彰宏／加藤雅之訳）、晶文社、一九九一年

竹田青嗣『ハイデガー入門』講談社（講談社メチエ）、一九九五年、一三四―一五〇頁

ジャック・デリダ『根源の彼方に――グラマトロジーについて（上）』足立和浩訳、現代思潮社、一九七二年

マルティン・ハイデガー『存在と時間（下）』細谷貞雄訳、筑摩書房（ちくま学芸文庫）、一九九四年

マルティン・ハイデガー『現象学の根本諸問題』（『ハイデガー全集第24巻』）溝口兢一／松本長彦／杉野祥一訳、創文社、二〇〇一年

ジークムント・フロイト『フロイト著作集6』井村恒郎／小此木啓吾他訳、人文書院、一九七〇年

ジークムント・フロイト『自我論集』竹田青嗣編、中山元訳、ちくま学芸文庫、一九九六年

ポール・リクール『時間と物語Ⅲ』久米博訳、新曜社、一九九〇年

鷲田清一／大庭健二編『所有のエチカ』ナカニシヤ出版、二〇〇一年

Margery Arent SAFIR ed., *Melancholies of Knowuledge—Literature in the Age of Science—*, State University of New York Press, 1999